専門教育科目

前期課程 1期 英語学研究 Ⅲ 統語論

川原　功司

授業概要並びに到達目標

この講義は、形式統辞論の基礎を理解することで、学生がこの分野で使用される道具の使い方と基本的な考え方について身につけることを主眼とする。主に扱う話題は、構造、習得の問題、局所性、フレーズマーカー、構造変異、言語獲得、人工知能、その他の統辞現象である。
この講義では、形式統辞論の基礎を身につけるために、精密にテキストを読み、内容を把握し、批判的に分析できる基礎力を養う。そのためにチュートリアル方式を採用し、受講者は毎回の出題範囲についてハンドアウトを使用し、議論の素地を十全に準備してくることが求められる。最低でも、事前・事後学習として３時間以上の学習時間を想定している。なお、14回目はオンライン授業を予定している。

授業計画

第１回：イントロダクション
第２回：弱生成性と強生成性
第３回：形式言語の階層性
第４回：句構造を越えて
第５回：複雑な構造を越えて
第６回：構造形成
第７回：刺激貧困の問題の古典的議論
第８回：刺激貧困の問題の視点
第９回：ベイズ統計
第10回：貧困の問題が語るもの
第11回：構造はどこから来たか
第12回：局所効果
第13回：循環移動
第14回：局所性の問題
第15回：構造関係

成績評価基準

毎回のチュートリアルの出来100% で評価する。

教科書（参考書）

以下のテキストを使用する（ハードカバー、ペーパーバック、電子版、何でも可）。

Lasnik, Howard and Juan Uriagereka. 2022. Structure: Concepts, Consequences, Interactions. The MIT Press.

前期課程 2期 英語学研究 Ⅳ 統語論

川原　功司

授業概要並びに到達目標

この講義は、形式統辞論の基礎を理解することで、学生がこの分野で使用される道具の使い方と基本的な考え方について身につけることを主眼とする。主に扱う話題は、構造、習得の問題、局所性、フレーズマーカー、構造変異、言語獲得、人工知能、その他の統辞現象である。
この講義では、形式統辞論の基礎を身につけるために、精密にテキストを読み、内容を把握し、批判的に分析できる基礎力を養う。そのためにチュートリアル方式を採用し、受講者は毎回の出題範囲についてハンドアウトを使用し、議論の素地を十全に準備してくることが求められる。最低でも、事前・事後学習として３時間以上の学習時間を想定している。なお、14回目はオンライン授業を予定している。

授業計画

第１回：イントロダクション
第２回：局所性の問題
第３回：寄生空所、タフ移動など
第４回：フレーズマーカー
第５回：二股枝分かれ構造
第６回：ラベルの問題
第７回：依存関係と連鎖
第８回：構造変異
第９回：通言語学的問題
第10回：素性、類似など
第11回：動的構造モデル
第12回：見えない問題
第13回：統辞論が抱える問題
第14回：言語学と科学の関係
第15回：人間言語と人工知能

成績評価基準

毎回のチュートリアルの出来100% で評価する。

教科書（参考書）

以下のテキストを使用する（ハードカバー、ペーパーバック、電子版、何でも可）。

Lasnik, Howard and Juan Uriagereka. 2022. Structure: Concepts, Consequences, Interactions. The MIT Press.

前期課程 1期 英語学研究 V 意味論・語用論

上田　功

授業概要並びに到達目標

この講義では、意味論と語用論のいくつかの分野を、基本的な英語文献を精読しながら概観する。意味論分野は、レキシコン、否定、同意性と反意性、テンスとアスペクト、有標性などで、語用論は会話の原理、(語用論的)前提、丁寧さ、ダイクシス、ジェンダーと語用等を取り上げ、１学期と２学期にバランス良く配置する。受講者には輪番で文献の担当部分の発表を求められる。なお、14週目はオンラインで実施する。

授業計画

第１回：オリエンテーション
第２回：会話の原理(1)
第３回：会話の原理(2)
第４回：会話の原理(3)
第５回：意味とレキシコン(1)
第６回：意味とレキシコン(2)
第７回：否定(1)
第８回：否定(2)
第９回：否定(3)
第10回：同意性と反意性(1)
第11回：同意性と反意性(2)
第12回：前提(1)
第13回：前提(2)
第14回：前提(3)
第15回：まとめ

成績評価基準

毎回の発表(60%)、議論への貢献度(20%)、適宜課されるフィードバック(20%)により評価する。

教科書(参考書)

Hofmann, Th. R. (1993) Realms of Meaning. Longman
Elgin, S. (1980) The Gentle Art of Verbal Self-defense. Barns & Noble など
教材はこちらで用意します。

前期課程 2期 英語学研究 VI 意味論・語用論

上田　功

授業概要並びに到達目標

この講義では、意味論と語用論のいくつかの分野を、基本的な英語文献を精読しながら概観する。意味論分野は、レキシコン、否定、同意性と反意性、テンスとアスペクト、有標性などで、語用論分野は会話の原理、(語用論的)前提、丁寧さ、ダイクシス、ジェンダーと語用などを取り上げ、１学期と２学期にバランス良く配置する。受講者には輪番で文献の担当部分の発表を求められる。なお、14週目はオンラインで実施する。

授業計画

第１回：オリエンテーション
第２回：有標性(1)
第３回：有標性(2)
第４回：有標性(3)
第５回：丁寧さの原理(1)
第６回：丁寧さの原理(2)
第７回：丁寧さの原理(3)
第８回：語用論とジェンダー(1)
第９回：語用論とジェンダー(2)
第10回：語用論とジェンダー(3)
第11回：語用論とジェンダー(4)
第12回：ダイクシス(1)
第13回：ダイクシス(2)
第14回：ダイクシス(3)
第15回：まとめ

成績評価基準

毎回の発表(60%)、議論への貢献度(20%)、適宜課されるフィードバック(20%)により評価する。

教科書(参考書)

Hofmann, Th. R. (1993) Realms of Meaning. Longman
Lakoff, R. (1973) Language and Women's Place. Harper & Row
Fillmore, C. (1975) Santa Cruz Lectures on Deixis. Indiana University Linguistics Club など
教材はこちらで用意します。

前期課程 1期 英語教育法研究 I 言語習得論

佐取　美紀

授業概要並びに到達目標

英語教育に関する研究能力と英語授業実践に関わる専門的能力を養うことを目標にする。この授業では、第二言語教授・学習における言語習得、学習者要因、伝達能力と言語技能、評価について、英語学と英語教育学の研究成果をふまえて、理論と実践の両面から研究を行う。具体的には、研究論文等を読み、内容について理解を深め、批判的に分析を行うとともに教育実践への示唆を得る。併せて、英語教育の研究法についても理解を深めるようにする。

第１回～第13回、第15回の授業は対面で行う。第14回はオンラインで行う。

授業計画

第１回　授業内容の説明と計画
第２回　研究方法(質的研究・量的研究・混合法)
第３回　言語習得(先行研究)

第４回　言語習得（研究結果）
第５回　言語習得（考察と課題）
第６回　学習者要因（先行研究）
第７回　学習者要因（研究結果）
第８回　学習者要因（考察と課題）
第９回　伝達能力と言語技能（先行研究）
第10回　伝達能力と言語技能（研究結果）
第11回　伝達能力と言語技能（考察と課題）
第12回　評価（先行研究）
第13回　評価（研究結果）
第14回　評価（考察と課題）
第15回　研究課題の整理と考察

成績評価基準

授業中の取り組み、課題への対応状況、レポートの成績を総合的に判断して行う。

教科書（参考書）

教科書は使用しない。資料を配付する。
参考書については初回の授業で説明する。

前期課程 2期 | 英語教育法研究 Ⅱ 教育方法論

佐取　美紀

授業概要並びに到達目標

英語教育に関する研究能力と英語授業実践に関わる専門的能力を養うことを目標にする。この授業では、第二言語教授・学習における言語習得過程、指導理論と指導法、伝達能力と４技能、テスト法について、英語学と英語教育学の成果をふまえて、教育方法論の研究を行う。具体的には、内外の研究論文、教育実践の研究論文を読み、内容について理解を深め、批判的に分析を行うとともに教育実践の課題解決に向けて研究成果の活用を検討する。併せて、英語教育の研究法についても理解を深めるようにする。

第１回～第13回、第15回の授業は対面で行う。第14回はオンライン（Google Meet での同時双方向型）で行う。受講登録をした受講生には大学の電子メールで授業の前日までに Google Meet の URL を連絡する。

授業計画

第１回　授業内容の説明と計画
第２回　研究方法（理論研究、実験研究、実践研究）
第３回　言語習得過程（先行研究）
第４回　言語習得過程（研究結果の分析）
第５回　言語習得過程（研究成果の活用）
第６回　指導理論と指導法（先行研究）
第７回　指導理論と指導法（研究結果の分析）
第８回　指導理論と指導法（研究成果の活用）
第９回　伝達能力と４技能（先行研究）
第10回　伝達能力と４技能（研究結果の分析）
第11回　伝達能力と４技能（研究成果の活用）
第12回　テスト法（先行研究）
第13回　テスト法（研究結果の分析）
第14回　テスト法（研究成果の活用）
第15回　研究課題の整理と考察

成績評価基準

授業中の取り組み、課題への対応状況、レポートの成績を総合的に判断して行う。

教科書（参考書）

教科書は使用しない。資料を配付する。

前期課程 1期 | 英語教育法研究 Ⅲ 外国語学習理論１

田地野　彰

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉
講義では第二言語習得に関与する様々な要因について考究する。第二言語習得研究についての多様な研究成果を詳細に分析、解釈することにより、日本における外国語習得の現状理解、および生成 AI・ICT を活用した学習法、今後の研究方法などについての理解を深めることを目的とする。授業は、基本的に対面で行います（第14週目の授業はオンラインで実施予定）

〈到達目標〉
第二言語習得関係の研究論文などを理論的、批判的に読むアカデミックな読解力を養成する。事前学習にはテキスト本文の内容読解、テキスト内容への批判的思考などで180分以上が必要となる。

授業計画

第１回　Language, Learning, and Teaching (1) Questions about SLA
第２回　Language, Learning, and Teaching (2) Language and Teaching
第３回　Language, Learning, and Teaching (3) Three Perspectives on SLA
第４回　First Language Acquisition (1) Behavioral Approach
第５回　First Language Acquisition (2) Nativist Approach
第６回　First Language Acquisition (3) Functional Approach and Issues in FLA
第７回　Age and Acquisition (1) The Critical Period Hypothesis
第８回　Age and Acquisition (2) Cognitive and Affective Considerations
第９回　Age and Acquisition (3) Linguistic Considerations
第10回　Human Learning (1) Fundamental Concepts in Language Learning
第11回　Human Learning (2) Language Aptitude

第12回　Human Learning (3) Learning Theories
第13回　Individual Differences (1) Learning Styles
第14回　Individual Differences (2) Learning Strategies
第15回　Individual Differences (3) Strategies-Based Instruction

成績評価基準

成績評価は発表と課題など(50%)および学期末レポート(50%)で行うものとする。

教科書(参考書)

教科書

・Lightbown, P.M. & Spada, N. (2013) How Languages Are Learned. (OUP)　ISBN-13: 978-0194541268

参考図書

・鈴木孝明・白畑知彦(2012)『ことばの習得－母語獲得と第二言語習得』(くろしお出版)ISBN978-4-87424-544-6
・新多了・馬場今日子(2016)『はじめての第二言語習得論講義』(大修館)ISBN978-4469246087

前期課程 2期　英語教育法研究 Ⅳ　外国語学習理論2

田地野　彰

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉

本授業では外国語学習に関わる諸要因を扱った研究を概観し、外国語学習研究の全体像について考究する。外国語学習論におけるこれまでの研究の歴史や概要についてまとめた論文や専門書を通して、基本的な概念を理解し、批判的思考力や読解力の育成をめざす。事前学習には論文の要旨作成などを含め180分以上が必要である。(参考文献は「教科書欄」に掲載。)

〈到達目標〉

英語教育・指導の観点から外国語学習に関する研究成果の活用についての理解を深める。

〈授業方法〉

基本的に対面にて授業を行います(第14週目の授業はオンラインで実施予定)。なお、資料の配信についてはGoogle Classroom を使う予定です。

授業計画

第１回　SLA 理論
第２回　SLA の研究方法
第３回　第二言語知識の本質
第４回　第二言語教室でのインタラクション
第５回　フォーカス・オン・フォーム
第６回　第二言語教室における社会文化理論
第７回　文法の習得
第８回　文法の習得(教育的示唆)
第９回　語彙の習得
第10回　発音の習得
第11回　語用知識の習得
第12回　ISLA の環境
第13回　個人差と ISLA
第14回　研究と教育実践のつながり
第15回　指導への示唆

成績評価基準

成績評価は、発表や課題など(50%)、および最終レポート(50%)で行うものとする。

教科書(参考書)

〈教科書〉

佐野富士子ほか(2022)『学びの場での第二言語習得論』(開拓社)ISBN978-4-7589-2362-0

〈参考図書・資料〉

Ellis, R. (2015) Understanding Second Language Acquisition. (OUP) ISBN-13: 978-0194422048
Loewen, S. (2020) Introduction to Instructed Second Language Acquisition (2nd ed.). Routledge. ISBN: 978-1138-67178-2

前期課程 1期　英語教育法研究 Ⅴ　英語教育と異文化間コミュニケーション

古村　由美子

授業概要並びに到達目標

授業概要

本授業では、外国語教育全般について世界的な視点から概観し、これまでの外国語教育の流れと異文化コミュニケーション能力の関係について考究する。具体的には、外国語教育とアイデンティティとの関連、外国語教育の目的・可能性、異文化コミュニケーション能力と外国語学習、研究方法、外国語教育におけるナショナリズムとインターナショナリズム、ヨーロッパにおける言語学習について理解を深め、批判的思考を行いて議論し、問題点と今後の展望について考察する。

授業方法

第14回目は Zoom にてオンライン授業を実施。それ以外の授業は対面で行います。
事前に各回の授業内容を要約し、その内容を基に批判的思考を用いて議論します。

授業計画

1　オリエンテーション　批判的思考について
2　コンテクストの中の外国語教育(外国語教育の定義と政策)
3　コンテクストの中の外国語教育(外国語教育の評価と立案)
4　外国語教育の目的(外国語教育がもたらす恩恵)
5　外国語教育の目的(具体的な目的の事例)/外国語学習は学校教育の中で可能なのか(政策立案者のねらい)

6　外国語学習は学校教育の中で可能なのか（義務教育修了時における到達目標）
7　相互文化的話者（二文化併用について）
8　相互文化的話者（相互文化的に行動すること）
9　相互文化的能力と小学校における外国語学習（コンテクストと学習内容）
10　相互文化的能力と小学校における外国語学習（初等教育における文化の学習とカリキュラム）
11　分析型研究と提唱型研究（外国語教育の文化的側面についての研究）
12　分析型研究と提唱型研究（文化学習の方向性）/ 外国語におけるナショナリズムとインターナショナリズム（言語教育者と外国語教育者）
13　外国語におけるナショナリズムとインターナショナリズム（社会化と社会的アイデンティティ）
14　ヨーロッパにおける言語学習（言語とアイデンティティ）
15　ヨーロッパにおける言語学習（ヨーロッパ人アイデンティティと言語学習）

成績評価基準

各回の授業内容を要約（70％）、課題・議論への参加度（30％）

教科書（参考書）

教科書：『相互文化的能力を育む外国語教育―グローバル時代の市民性形成をめざして』バイラム、マイケル【著】細川 英雄【監修】/ 山田 悦子 / 古村 由美子【訳】大修館書店　3080円（税込）

参考書：From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections　Michael Byram（著）　Multilingual Matters Ltd
（図書館所蔵）

前期課程 2期　英語教育法研究 Ⅵ　英語教育と異文化間コミュニケーション

古村　由美子

授業概要並びに到達目標

本授業では、著者が提唱している「相互文化的市民性」（Intercultural Citizenship）という概念に関連づけて、言語教育の様々な側面について概観する。多様な文化の混在する社会において、他者と民主的に共生できるようになるための「市民性」の意義、その育成のための教育方法、方針、カリキュラム、評価についての著者の考えを理解し、批判的思考を用いて分析する。この「市民性」形成と異文化コミュニケーション学習を英語教育においてどう実践するかについて考察を広げる。関連する論文を読み、理解し、今後の展望について議論する。

授業方法
第14回目は Zoom にてオンライン授業を実施。それ以外の授業は対面で行う。
事前に各回の授業内容を要約し、その内容を基に批判的思考を用いて議論します。

授業計画

1　オリエンテーション　批判的思考について
2　政治行動としての外国語学習（言語教師育成教育）
3　政治行動としての外国語学習（教師養成指導者のための教育）
4　言語教育、政治教育、相互文化的市民性（クリティカルな文化意識）
5　言語教育、政治教育、相互文化的市民性（概念に関する相対主義と言語相対主義）
6　相互文化的市民性を育てる教育（政治教育と言語教育の枠組み）
7　相互文化的市民性を育てる教育（４つの関連する原理）
8　相互文化的市民性教育のための方針（市民とその共同体）
9　相互文化的市民性教育のための方針（国民国家を超える市民性教育）
10　相互文化的市民性教育のためのカリキュラム（教育における超国家的政治的活動）
11　相互文化的市民性教育のためのカリキュラム（相互文化的に行動する段階）
12　相互文化的能力と相互文化的市民性のアセスメントと評価（Assessment と Evaluation）
13　相互文化的能力と相互文化的市民性のアセスメントと評価（ポートフォリオとプロフィール）/ 英語教育における異文化コミュニケーション学習の位置づけ
14　論文の要約
15　論文の分析

成績評価基準

各回の授業内容を要約（70％）、課題・議論への参加度（30％）

教科書（参考書）

教科書：『相互文化的能力を育む外国語教育―グローバル時代の市民性形成をめざして』バイラム、マイケル【著】細川 英雄【監修】/ 山田 悦子 / 古村 由美子【訳】大修館書店　3080円（税込）

参考書：From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections　Michael Byram（著）　Multilingual Matters Ltd
（図書館所蔵）

前期課程 1期　英語圏文化研究 Ⅰ　アメリカの小説と文化

梅垣　昌子

授業概要並びに到達目標

20世紀の前半にハリウッドの脚本家としても活動していたアメリカ南部の作家ウィリアム・フォークナーは、架空の土地ヨクナパトーファを舞台とする作品を多数執筆しノーベル文学賞を受賞した。また東西の冷戦期にアメリカ政府の文化広報活動に

関わり、日本をはじめとする世界各地を訪れている。この授業では、小説家としてだけでなく、脚本家としても活躍したフォークナーの作品を精密に読み込むことにより、技術革新の時代における表現方法の可能性と多様性について考察する。また、フォークナー作品の読解にあたって重要な語りの問題に注目し､語られる内容と語られ方の関係性について考察を深める。その過程で和文および英文の文学批評を熟読し、適切な様式を用いながら先行研究を踏まえた論文作成を行う。毎回の授業のための準備として作品や資料の読解および読解内容についての考察が必須である。

授業計画

第１回　講義内容の説明と計画
第２回　アメリカ文学とナラトロジー１（モダニズムとポストモダニズム）
第３回　アメリカ文学とナラトロジー２（長編と短編）
第４回　アメリカ文学とナラトロジー３（映像作品）
第５回　作品の読解１（The Country）“Barn Burning”
第６回　作品の読解２（The Village）“Dry September”
第７回　作品の読解３（The Wilderness）“Lo!”
第８回　作品の読解４（The Wasteland）“Turnabout”
第９回　作品の読解５（The Middle Ground）“Mountain Victory”
第10回　フォークナーとアメリカ南部：作品の読解６（Beyond）“Carcassonne”
第11回　フォークナーと文学批評１ 伝記的アプローチ（導入）
第12回　フォークナーと文学批評２ 伝記的アプローチ（実践）
第13回　フォークナーと文学批評３ 作品論（導入）
第14回　フォークナーと文学批評４ 作品論（実践）　→この回のみオンライン（ZOOM）で遠隔授業を行います
第15回　まとめと考察：研究課題と成果の確認

成績評価基準

授業準備の成果をふまえた授業中の取り組みと考察結果の発表（40％）および期末レポートとその準備に向けた課題（60％）により総合的に評価する。

教科書（参考書）

１）William Faulkner. Collected Stories. Vintage 2009.
２）随時資料を配布する
３）参考書については授業で課題ごとに指定する

前期課程 2期　英語圏文化研究 Ⅱ　アメリカの小説と文化

梅垣　昌子

授業概要並びに到達目標

20世紀の前半にハリウッドの脚本家としても活動していたアメリカ南部の作家ウィリアム・フォークナーは、架空の土地ヨクナパトーファを舞台とする作品を多数執筆しノーベル文学賞を受賞した。また東西の冷戦期にアメリカ政府の文化広報活動に関わり、日本をはじめとする世界各地を訪れている。この授業では、フォークナーおよびフォークナーの影響を受けた作家たちの作品を精密に読み込むことにより、グローバル化時代における地域性および空間と場所の概念について考察する。また、フォークナー作品の読解にあたって重要な語りの問題に注目し、語られる内容と語られ方の関係性について考察を深める。その過程で和文および英文の文学批評を熟読し、適切な様式を用いながら先行研究を踏まえた論文作成をめざす。毎回の授業のための準備として作品や資料の読解および読解内容についての考察が必須である。

授業計画

第１回　講義内容の説明と計画
第２回　物語の構造分析１（19世紀アメリカ文学の系譜）
第３回　物語の構造分析２（20世紀アメリカ文学の系譜）
第４回　物語の構造分析３（モダニズムとポストモダニズム）
第５回　フォークナーとアメリカ南部：作品の読解１（The Country）
第６回　フォークナーとアメリカ南部：作品の読解２（The Village）
第７回　フォークナーとアメリカ南部：作品の読解３（The Wilderness）
第８回　フォークナーとアメリカ南部：作品の読解４（The Wasteland）
第９回　フォークナーとアメリカ南部：作品の読解５（The Middle Ground）
第10回　フォークナーとアメリカ南部：作品の読解６（Beyond）
第11回　フォークナーと文学批評１（フォークナーと日本１）
第12回　フォークナーと文学批評２（フォークナーと日本２）
第13回　フォークナーと文学批評３（フォークナーとラテンアメリカ）
第14回　フォークナーと文学批評４（フォークナーとヨーロッパ）　→この回のみオンライン（ZOOM）で遠隔授業を行います
第15回　まとめと考察：研究課題と成果の確認

成績評価基準

授業準備の成果をふまえた授業中の取り組みと考察結果の発表（40％）および３回のレポート課題（60％）により総合的に評価する。

教科書（参考書）

１）William Faulkner. Collected Stories. Vintage 2009.
２）随時資料を配布する
３）参考書については授業で課題ごとに指定する

前期課程 1期 英語圏文化研究 Ⅲ イギリス文化論

岡田　新

授業概要並びに到達目標

イギリス現代史の専門書を読み、イギリスの現代政治の形成についてデスカッションする。
google classroom で連絡を行う。
John Grigg Lloyd George War Leader, 1915-1918を分担して読み、訳をつくり、固有名詞などをしらべて注をつける。
疑問点をあげ、デスカッションを通じてイギリス現代政治の形成の諸論点について理解を深める

授業計画

1　introduction　授業の仕方　ウエールズとロイド・ジョージ
2　Background　19世紀末から20世紀初頭のロイド・ジョージ
3　Background　第一次大戦とロイドジョージ
4　講読と討論　Extreme danger
5　講読と討論　War Cabinet
6　講読と討論　Conference at Calais
7　講読と討論　Crisis at Sea
8　講読と討論　America Comes in
9　講読と討論　Nivelle's Nemesis
10　講読と討論　Electoral Reform
11　講読と討論　Farming and Food
12　講読と討論　Honours
13　講読と討論　Haig gets His Way
14　講読と討論　New Appointment　（オンライン授業）
15　講読と討論　Arthur Henderson and Neville Chamberlain

成績評価基準

平常点　50%
レポート 50%

教科書（参考書）

John Grigg, Lloyd George War Leader　1916-1918
プリントで配布する

前期課程 2期 英語圏文化研究 Ⅳ イギリス文化論

岡田　新

授業概要並びに到達目標

イギリス現代史の専門書を読み、イギリスの現代政治の形成についてデスカッションする。
google classroom で連絡を行う。
John Grigg Lloyd George War Leader, 1915-1918を分担して読み、訳をつくり、固有名詞などをしらべて注をつける。
疑問点をあげ、デスカッションを通じてイギリス現代政治の形成の諸論点について理解を深める

授業計画

1　introduction　第一次大戦の意義
2　Background　戦間期の特質
3　Background　ロイド・ジョージの没落
4　講読と討論　Lloyd George's Boswell
5　講読と討論　War from the Air
6　講読と討論　Passchendaele
7　講読と討論　Clemenceau
8　講読と討論　The House party
9　講読と討論　Allied Conclaves
10　講読と討論　The Balfour Declaration
11　講読と討論　Manpower
12　講読と討論　Speeches
13　講読と討論　Rhonda and Rationing
14　講読と討論　Robertson Goes　（オンライン授業）
15　講読と討論　Before the Storm

成績評価基準

平常点　50%
レポート 50%

教科書（参考書）

John Grigg, Lloyd George War Leader　1916-1918
プリントで配布する

前期課程 2期 英語圏文化研究 Ⅵ ニュージーランド文化論

Simon J. Humphrey

授業概要並びに到達目標

The focus will be on New Zealand culture. It will be divided into three sections dealing with the History, Language, and Culture of New Zealand.
Students should spend 180 minutes outside of class reading, summarizing, and reviewing the reading material for their next class. Students will be expected to take an active participation in the weekly discussions.

授業計画

The whole course will be taught in English only. There will be an assessment every 5th week. During this course, the students will become acquainted with the History, Language, and Culture of New Zealand (See below for details). Students should be prepared to take an active role in class discussions, debating the relevant issues they have read about. Students will learn to read with a critical eye, as well as form opinions based on sound judgement. Guidance and assistance will be provided throughout the semester.

Week 1: Orientation
Weeks 2–12: Guidance for Report writing, Reading, Discussing,

and Doing the weekly reading worksheets
Week 14: The 14th week will be taught online.
Week 15: Feedback

The course is divided into 3 sections with a report for each:

History:
Māori settlement
European discovery
Treaty of Waitangi
British control
Presentation/Discussion/Assignment

Language:
Māori Language revival
New Zealand English: accent
New Zealand English: vocabulary
TV, Film and literature
Presentation/Discussion/Assignment

Culture:
British influence
Māori customs
Sports
Lifestyle
Presentation/Discussion/Assignment

成績評価基準

· Assignments: 75%
· Participation during in-class discussions: 25%

教科書(参考書)

None: All materials will be provided by the lecturer.

前期課程 1期 日本語学研究 I 日本語学概論

早津　恵美子

授業概要並びに到達目標

●授業概要：日本語の文法構造について概観したあと、日本語の具体的な言語現象をめぐって考察する。
●到達目標：日本語の文法現象について「規則・きまり」を受動的に覚えるというのでなく、自らが話したり書いたり聞いたり読んだりする日本語について、その実態を内省しながら考えることによって、そこにひそむ法則的なものを見いだしていく力を身につける。
●授業形態：第14週の授業は zoom によるオンライン(リアルタイム)、それ以外の週は対面で行う。Google classroom に授業サイト「【院】日本語学概論(2025-1 火１)」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示等に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom の招待メールを送るので、各自でアクセスして準備すること。第14週目の授業(zoom)へのアクセス方法も Google Classroom で知らせる。

授業計画

1）授業の説明と計画
2）単語と文
3）文法とは
4）文の内部構造
5）品詞と文の成分
6）品詞の転成
7）語彙的な意味と文法的な性質―単語の語彙的な意味
8）語彙的な意味と文法的な性質―単語の文法的な意味
9）語彙的な意味と文法的な性質―単語のカテゴリカルな意味
10）単語のもつ文法的な性質―形態論的な性質
11）単語のもつ文法的な性質―形態論的なカテゴリー
12）単語のもつ文法的な性質―構文論的な性質
13）単語のもつ文法的な性質―構文論的なカテゴリー(命題的)
14）単語のもつ文法的な性質―構文論的なカテゴリー(陳述的)
※ zoom によるオンライン授業
15）まとめと理解度の確認

成績評価基準

次の割合を目安に、総合的に判断する。授業への貢献(50%)、レポート(50%)。

教科書(参考書)

プリント・資料を配布する。

前期課程 2期(集中) 日本語学研究 II 日本語談話研究

楊　虹

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉
談話、特に話し言葉の分析に関する理論と実践を、講義と文献講読、発表を通して学ぶ。語用論、会話分析、相互行為の社会言語学といった主要な理論を理解し、日本語母語場面や日本語接触場面を対象とした研究や日本語と他言語の対照研究の文献を読み、実際に会話データを収集し分析する体験を通して、談話研究の基礎を学ぶ。

〈到達目標〉
日本語母語話者の会話の特徴を把握し、談話分析を用いた研究方法の基礎を身につける。

授業計画

第１回　授業の概要、談話分析とは(オンライン)
第２回　語用論(1) 発話行為(オンライン)
第３回　語用論(2) 会話の含意(オンライン)
第４回　語用論(3) ポライトネス理論(オンライン)

第５回　会話データの収集と分析（オンライン）
第６回　会話データベースの構築
第７回　会話分析（1）話者交替と隣接ペア
第８回　会話分析（2）話し手と聞き手の役割
第９回　相互行為の社会言語学（1）会話のスタイル
第10回　相互行為の社会言語学（2）対照研究
第11回　SNS オンラインコミュニケーションの分析
第12回　会話データの分析（演習１）
第13回　会話データの分析（演習２）
第14回　研究発表
第15回　全体のまとめ

成績評価基準

課題　30％
全体の討議及びグループ活動等への参加度　30％
発表　40％

教科書（参考書）

・講義資料と関連文献を随時配布する。
主要参考図書
デボラ・カメロン（林宅男監訳）（2012）『話し言葉の談話分析』ひつじ書房
山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現－日本語語用論入門』明治書院
高木智世・細田由利・森田笑（2016）『会話分析の基礎』ひつじ書房

前期課程 1期　日本語学研究 Ⅲ　日本語音声学・音韻論

中北　美千子

授業概要並びに到達目標

話し言葉の分析や音声を刺激とした実験に関心のある学生を対象として、音声学および音韻論の基礎知識と、実際に音声信号を分析するための基礎的な技術を身につけてもらうことを目標とする。
人間の音声産出のメカニズム、物理的な信号としての音声の特徴、日本語話者の音声知覚の特性など、日本語の話し言葉の物理的側面と心理的側面について、要点を概説する。また、音響信号分析用のソフトウェアを利用して、実際に音声を録音して分析する演習を行う。受講生は各自ノート PC 持参のこと（音声分析のフリーソフト Praat が使えるもの）。
◆資料の提示や連絡のために classroom を使用するので、第１回授業までに履修登録者の NUFS メールに招待を送ります。第14週はオンライン授業で、zoom を使用します。
◆受講者の知識や関心に応じて進度や内容を調整します。

授業計画

第１回：受講ガイダンス
第２回：発声の仕組み
第３回：日本語の母音
第４回：調音の仕組みと日本語の子音
第５回：音声記号
第６回：音声と音韻
第７回：確認テスト１（母音と子音）
第８回：音声信号の特性（PC 持参）
第９回：音声分析のための基礎知識（母音と子音）（PC 持参）
第10回：音声分析のための基礎知識（スペクトログラム）（PC 持参）
第11回：アクセントの型（PC 持参）
第12回：複合語のアクセント（PC 持参）
第13回：イントネーション（PC 持参）
第14回：（オンライン）確認テスト２（アクセントとイントネーション）
第15回：まとめ

成績評価基準

以下の割合を目安に総合的に判定する。
確認テスト１・２（50％）
授業貢献度（50％）

教科書（参考書）

講義時に必要に応じて資料を配付し、参考文献を紹介する。

前期課程 2期　日本語学研究 Ⅴ　日本語学特論

中北　美千子

授業概要並びに到達目標

日本語の文法現象や語用論的現象が話し言葉においてどのような音声的特徴をもって実現されているかを観察するための多様な視点と手法を学ぶことを目標とする。話し言葉の分析や音声刺激を使った実験に必要な技術の基礎を学び、演習や文献講読を行う。また、音響分析用のソフトウェアを利用して、実際に音声を録音して分析する演習を行うので、受講生は各自ノート PC 持参のこと（音声分析のフリーソフト Praat が使えるもの）。
◆資料の提示や連絡のために classroom を使用するので、第１回授業までに履修登録者の NUFS メールに招待を送ります。第14週はオンライン授業で、zoom を使用します。
◆受講者の知識や関心に応じて進度や内容を調整します。

授業計画

第１回：受講ガイダンス
　　文献購読準備
第２回：発話機能・文末表現・文末イントネーション（PC 持参）
第３回：文献講読（ノイズ・非流暢性）
第４回：文献講読（フィラー・感動詞）
第５回：文献講読（文末表現）
第６回：文献講読（その他）
第７回：文献講読（話し言葉のデータ収集方法）
第８回：話し言葉のデータ収集方法検討
第９回：話し言葉のデータ収集準備

第10回：話し言葉の分析演習（ピッチ曲線）
第11回：話し言葉の分析演習（その他）
第12回：分析結果中間報告
第13回：分析結果発表
第14回：（オンライン）分析についてディスカッション
第15回：まとめと振り返り

成績評価基準

以下の割合を目安に総合的に判定する。
分析結果発表（50％）
授業貢献度（50％）

教科書（参考書）

講義時に必要に応じて資料を配付し、参考文献を紹介する。

前期課程 1期 日本語学研究 Ⅶ 日本語文法論

早津　恵美子

授業概要並びに到達目標

●授業概要：語彙と文法（構文論と形態論）とが関わる様々な現象を確認し、語彙と文法をつなぐ要としてのカテゴリカルな意味について詳説し参加者と議論する。
●到達目標：語彙の研究と教育においても文法の研究と教育においてもカテゴリカルな意味の理解が重要であることを具体的な現象の分析を通じて身につける。
●授業形態：第14週の授業は zoom によるオンライン（リアルタイム）、それ以外の週は対面で行う。Google classroom に授業サイト「【院】日本語文法論（2025-1 水３）」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom の招待メールを送るので、各自でアクセスして準備すること。第14週目の授業（zoom）へのアクセス方法も Google Classroom で知らせる。

授業計画

●内容は以下のような予定である。ただし、参加者との相談によって微調整することがある。
1）ガイダンス：授業の説明と計画
2）単語の語彙的な意味
3）単語の文法的な意味
4）単語のカテゴリカルな意味
5）文法的な意味とカテゴリカルな意味
6）構文論と形態論
7）単語の形態論的な性質（命題的）とカテゴリカルな意味
8）単語の形態論的な性質（陳述的）とカテゴリカルな意味
9）単語の構文論的な性質とカテゴリカルな意味
10）単語の多義性とカテゴリカルな意味
11）語彙的な意味の多側面性とカテゴリカルな意味
12）単語の類義性とカテゴリカルな意味
13）単語の対義性とカテゴリカルな意味
14）複合語とカテゴリカルな意味　※ zoom によるオンライン授業
15）まとめと理解度の確認

成績評価基準

次の割合を目安に、総合的に判断する。授業への貢献（50％）、レポート（50％）。

教科書（参考書）

プリント・資料を配布する。

前期課程 2期 日本語学研究 Ⅸ 日本語語彙論

早津　恵美子

授業概要並びに到達目標

●授業概要：単語は語彙・文法的な単位であり、単語には語彙的な性質と文法的な性質がある。本学期は語彙的な性質のうち特に、文体的な性質、位相、語種、語構成等について、配布資料をもとに考察する。また、必要に応じて論文の購読も行う。
●到達目標：日本語の語彙の性質について内省力や理解力が深まる。
●授業形態：第14週の授業は zoom によるオンライン（リアルタイム）、それ以外の週は対面で行う。Google classroom に授業サイト「【院】日本語語彙論（2025-2 火３）」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom の招待メールを送るので、各自でアクセスして準備すること。第14週目の授業（zoom）へのアクセス方法も Google Classroom で知らせる。

授業計画

1）ガイダンス：授業の説明と計画
2）語彙・文法的な単位としての単語
3）単語の単語彙的な性質の概要
4）品詞と単語の意味
5）品詞の転成
6）単語の文体的な性質と位相
7）語種
8）語種と意味領域
9）語種と意味の体系
10）語構成
11）語構成（複合語の構成と意味）
12）語構成（派生語の構成と意味）
13）語構成（連濁と転音）
14）慣用句の単位性　※ zoom によるオンライン授業
15）まとめと理解度の確認

成績評価基準

次の割合を目安に、総合的に判断する。授業中の分担発表と議

論への貢献(50%)、学期末のレポート(50%)。

教科書(参考書)

プリント・資料を配布する。

前期課程 1期 日本語教育学研究 I 第二言語習得論

近藤　行人

授業概要並びに到達目標

I 期では、認知的アプローチに基づく第二言語習得研究を概観し、日本語教育研究者としての高度な研究能力養成を目指す。日本語教育の基礎科学として位置付けられる第二言語習得研究と日本語教育実践とのつながりについても受講生と議論して考えていく。

授業では、言語習得観、第一言語の影響、IIO モデル、個人差要因、教室習得研究について扱う。それぞれの分野における研究論文等を読み、内容について理解を深め、批判的に分析を行うとともに、研究手法や教育実践についての示唆を得る。

授業計画

第 1 回　オリエンテーション
　　SLA 研究の歴史意義
第 2 回　母語習得に関する 2 つの理論：原理とパラメーターのアプローチと用法基盤モデル
第 3 回　SLA における第一言語の影響(1)
第 4 回　SLA における第一言語の影響(2)
第 5 回　Krashen のモニターモデルから IIO モデルへ
第 6 回　個人差要因　年齢
第 7 回　個人差要因　適性
第 8 回　個人差要因　学習スタイル、学習ストラテジー、ビリーフ
第 9 回　個人差要因　動機づけ
第10回　教室における SLA(1)文法
第11回　教室における SLA(2)Focus on form
第12回　教室における SLA(3)語彙
第13回　教室における SLA(4)CBI と CLIL
第14回　SLA 研究の方法
　　※第14回の講義は ZOOM によるオンライン双方向形式で実施します。
第15回　まとめと振り返り

成績評価基準

授業参加度(30%)、授業内課題・発表(40%)、レポート(30%)

教科書(参考書)

参考書

※特定の教科書は使用しないが、以下の書籍を参考書とする。

小柳かおる(2021)『日本語教師のための新しい言語習得概論(改訂版)』スリーエーネットワーク

鈴木孝明・白畑智彦(2012)『言葉の習得：母語獲得と第二言語習得』くろしお出版

Shawn Loewen(2022)『学びの場での第二言語習得論』佐野富士子、齋藤英敏、長崎睦子他(訳)、開拓社

前期課程 2期 日本語教育学研究 II 第二言語習得論

近藤　行人

授業概要並びに到達目標

第二言語習得研究においては多くが「認知」的な研究である。しかし、近年は第二言語習得研究の分野でも社会的転回が提唱され、言語学習の社会的側面を捉えることができるようになった。このような流れの中で、第二言語習得においても非認知的な視点を持った理論、実践、研究が求められている。本講義では、第二言語習得における社会的転回により台頭してきた社会文化的アプローチ、複雑系理論、アイデンティティ、生態学的アプローチなどについて理解を深め、それぞれの領域における研究の展開について議論する。

授業の一部では、論文講読を行う。講読文献の担当箇所について各自が、内容の要点と論点を提示したレジュメを作成し、各自の担当部分の説明と議論を重ねて実施する。

授業計画

第 1 回　オリエンテーション
　　第二言語習得研究における社会的転回
第 2 回　第二言語習得研究における社会的視点
第 3 回　第二言語習得と生態学的アプローチ(1)
第 4 回　第二言語習得と生態学的アプローチ(2)
第 5 回　第二言語習得と生態学的アプローチ(3)
第 6 回　第二言語習得と複雑系理論(1)
第 7 回　第二言語習得と複雑系理論(2)
第 8 回　第二言語習得と複雑系理論(3)
第 9 回　第二言語習得と社会文化的アプローチ(1)
第10回　第二言語習得と社会文化的アプローチ(2)
第11回　第二言語習得と社会文化的アプローチ(3)
第12回　第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(1)
第13回　第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(2)
第14回　第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(3)
　　※第14回は ZOOM によるオンライン双方向形式で実施します。
第15回　社会的転回後の第二言語習得研究

成績評価基準

授業参加(30%)、授業内課題･発表(40%)、期末レポート(30%)

教科書(参考書)

参考書

Block, D (2003)The social Turn in Second Language Acquisition Edinbugh University press.

Atkinson, D. (Ed). (2011) Alternative approaches to second

language acquistion. Routledge.
馬場今日子・新多了(2020)『はじめての第二言語習得論講義：英語学習への複眼的アプローチ』大修館書店

前期課程 1期 日本語教育学研究 Ⅲ 日本語教育評価法

近藤　行人

授業概要並びに到達目標

【授業概要】
日本語学習を評価することは、日本語学習の成果や学習者の成長を何らかの物差しで測ることである。この授業では、教育現場の実務において必要な評価の基礎知識と評価の実際についての様々な問題を取り上げる。学習者の学びを適切に評価するための手法を学び、どうすれば有用性の高い評価ができるのか、その手続きや実際の評価を通して検討し、その手法を修得する。
【到達目標】
日本語教育の評価に関する基礎的な知識を身に付け、実際の教育現場における評価を実施することができるようになる。
【準備学習】
講師から課される課題の取り組みなど、授業外でも他の履修者と協働して準備するなどの学習が求められる。

授業計画

1回　オリエンテーション　評価のイメージ
2回　教育評価についての基礎知識 (1) 診断的評価、形成的評価、総括的評価、
目標基準テスト・集団準拠テスト 、相対的評価・絶対的評価
3回　教育評価についての基礎知識 (2) コミュニケーション能力
4回　教育評価についての基礎知識 (3) シラバスの役割・成績判定と報告・有用性・波及効果
5回　テストを作る (1) テスト方針の決定、テストデザインの決定、テスト細目表、問題案の作成、問題案の検討、実施要項作成
6回　パフォーマンステスト (1) タスク(ロールプレイとスピーチ)
7回　パフォーマンステスト (2) 評価基準
8回　言語能力の指標　CEFR･JF スタンダード
9回　関連論文講読　CEFR に関する関連論文
10回　関連論文講読　Can-do Statements に関する評価
11回　パフォーマンステストの実施と評価
12回　テストを作る (2) テストの問題例：文法・語彙・文字のテスト
13回　テストを作る (3) テストの問題例：読解テスト・聴解テスト
14回　関連論文講読　評価者特性による評価のずれ
※第14回の講義は ZOOM によるオンライン双方向形式で実施します。
15回　テストを作る (4) テストをテストする

成績評価基準

授業への貢献度(20%)、課題(40%)、最終レポート(40%)で行う予定である。

教科書(参考書)

教科書なし
参考書：
・近藤ブラウン妃美(2012)『日本語教師のための評価入門』くろしお出版
・村上京子他(2013)『テストを作る』スリーエーネットワーク
・国際交流基金(2011)『学習を評価する』国際交流基金
・野口裕之・大隅敦子(2014)『テスティングの基礎理論』研究社

前期課程 2期 日本語教育学研究 Ⅳ 日本語教育評価法

近藤　行人

授業概要並びに到達目標

【概要】
Ⅱ期では、対話や協働を扱う評価や社会文化的アプローチによる評価、教室を離れた評価などの様々な「新しい評価」とされる文献を講読する。講読する文献は基本的には講師が選ぶが、受講者の希望等により、取り上げる内容を調整し、興味関心に沿った論文を講読することもある。
【準備学習】
発表準備等や、取り上げる論文を読むため、毎回１～２時間程度の準備を要する。受講者が準備する資料に基づいて教室活動を行うので、分担内容に責任を持つようにすること。

授業計画

1回　オリエンテーション
2回　文献講読「アセスメントの歴史と最近の動向」
3回　文献講読「CEFR における評価とアセスメント」
4回　文献講読「ピアラーニングとアセスメント」
5回　文献講読「ポートフォリオアセスメント」(1)
6回　文献講読「ポートフォリオアセスメント」(2)
7回　文献講読「ジャーナルアプローチとアセスメント」
8回　文献講読「CEFR-CV における仲介」
9回　文献講読「CEFR-CV における仲介を扱った研究論文」
10回　文献講読「対話的アセスメントの実践研究」(1)
11回　文献講読「対話的アセスメントの実践研究」(2)
12回　文献講読「外国人とのやりとりの経験は日本人の言語使用の意識を変えるか」
13回　文献講読「学生の評価観を理解する」
14回　文献講読「学習につながる自己評価―「生活のための日本語」教育の可能性―」
※第14回の講義は ZOOM によるオンライン双方向形式で実施します。
15回　まとめ　各自の研究の発表(調査、結果)、相互フィードバック

成績評価基準

授業への貢献度(20%)、担当箇所の発表(40%)、最終レポート(40%)で行う予定である。

教科書(参考書)

教科書なし

参考書

・佐藤慎二・熊谷由里他(2010)『アセスメントと日本語教育 新し評価の理論と実践』くろしお出版

・宇佐美洋(編)(2015)『「評価」を持って街に出よう「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて』くろしお出版

前期課程 1期 日本語教育学研究 V 日本語教育実践研究

近藤　有美

授業概要並びに到達目標

本授業では、近年教育全般で注目を集めている「対話」に焦点を当て、ことばの教育における「対話」の重要性について、その本質を理解することを目指す。そのため、本授業では、「対話」に焦点を当てた教育の論考を講読し、それらをもとにクラスでディスカッションを行う。

課題として論文を読み、Google Classroom に「疑問点」「ディスカッションしたい内容」等を授業前にアップロードしておくこと、また、他の学生が Google Classroom にあげた内容についても目を通し、授業でディスカッションできるよう準備しておくことが求められる。

論文講読、ディスカッション内容の検討等、180分程度の事前準備を必要とする授業である。

授業計画

〈授業形態等〉

第14週のみオンラインで、その他は対面形式で行う。オンラインへのリンク情報、受講生への諸連絡は、Google Classroom で行う。履修者の確認ができた時点で Google Classroom への招待を行うので、授業開始前に承諾しておくこと。履修登録しているにも関わらず、授業開始の前日になっても招待が届かない場合は、授業担当者にメールで問い合わせること。

第１回　コースのオリエンテーション／教育観に関するディスカッション

第２回　第１章：なぜ今対話なのか　〈内容理解〉

第３回　第１章：なぜ今対話なのか　〈クラスディスカッション〉

第４回　第１章：なぜ今対話なのか　〈まとめ〉

第５回　第２章：対話のためのテーマとは何か　〈内容理解〉

第６回　第２章：対話のためのテーマとは何か　〈クラスディスカッション〉

第７回　第２章：対話のためのテーマとは何か　〈まとめ〉

第８回　第３章：対話をデザインする　〈内容理解〉

第９回　第３章:対話をデザインする　〈クラスディスカッション〉

第10回　第３章：対話をデザインする　〈まとめ〉

第11回　第４章：対話をすることばの市民へ　〈内容理解〉

第12回　第４章：対話をすることばの市民へ　〈クラスディスカッション〉

第13回　第４章：対話をすることばの市民へ　〈まとめ〉

第14回　〈オンライン〉著者との対話セッション

第15回　クラスディスカッション「学習者主体と言語教育」／まとめ

成績評価基準

論文講読課題(20%)、発表(30%)、ディスカッションへの参加・貢献(30%)、レポート(20%)

教科書(参考書)

細川英雄(2019)『対話をデザインする―伝わるとはどういうことか』ちくま新書

※その他、参考文献に関しては授業内で紹介する。

前期課程 2期 日本語教育学研究 VI 日本語教育実践研究

近藤　有美

授業概要並びに到達目標

〈授業概要・到達目標〉

2019年の入管法の改正、日本語教育推進に関する法律の公布・施行以降、日本語教育を取り巻く環境は大きく変化している。その後のパンデミックが国内外の日本語教育に与えた影響も大きい。また、機械翻訳など人工知能のめざましい発展は、言語教育のみならず教育全体に「学びの意義」を問いかけているようにも思われる。このような変化の中、言語教育は、「何のために教えるのか」を考える必要に迫られている。本授業では、「ことばの教育は何を目指すのか」に焦点をあてた論考を講読し、「何のために教えるのか」をクラス全体で議論する。

最終的に、各自が自分の目指す日本語教育について言語化できることを目標とする。

授業計画

〈授業形態・準備学習等〉

講読課題として論文を読み、Google Classroom に疑問点、ディスカッションしたい内容等を授業前にアップしておくこと、また、他の学生が Google Classroom にあげた内容についても目を通し、授業でのディスカッションに向けて準備しておくこと。これらに180分程度の事前準備を必要とする。

第14週のみオンラインで、その他は対面形式で行う。オンラインへのリンク情報、受講生への諸連絡は、Google Classroom で行う。履修者の確認ができた時点で Google Classroom への招待を行うので、授業開始前に承諾しておくこと。履修登録しているにも関わらず、授業開始の前日になっても招待が届かない場合は、授業担当者にメールで問い合わせること。

第１回　コースのオリエンテーション／これまで受けてきた言語教育の振り返り

第２回　第１章：ことばの教育は何をめざすか(内容理解)

第３回　第１章：ことばの教育は何をめざすか(クラスディス

カッション）
第４回　第２章：「共生社会におけることばの教育」の実践としての「本質観取」（内容理解）
第５回　第２章：「共生社会におけることばの教育」の実践としての「本質観取」（クラスディスカッション）
第６回　第７章：民主的シティズンシップ教育のローカライズを考える（内容理解）
第７回　第７章：民主的シティズンシップ教育のローカライズを考える（クラスディスカッション）
第８回　第８章：人・ことば・社会のつながりを考える大学英語教育（内容理解）
第９回　第８章：人・ことば・社会のつながりを考える大学英語教育（クラスディスカッション）
第10回　第９章：評価が育てる学生、教師、日本語教育（内容理解）
第11回　第９章：評価が育てる学生、教師、日本語教育（クラスディスカッション）
第12回　第６章：共生社会で活かされる「複言語・複文化主義」的発想（内容理解）
第13回　第６章：共生社会で活かされる「複言語・複文化主義」的発想（クラスディスカッション）
第14回　〈オンライン〉自身の「複言語複文化」性について考える
第15回　「複言語複文化」性について考える（ディスカッション）／まとめ

成績評価基準

論文講読課題（20％）、発表（30％）、ディスカッションへの参加・貢献（30％）、レポート（20％）

教科書（参考書）

稲垣みどり・細川英雄・金泰明・杉本篤史（2022）『共生社会のためのことばの教育－自由・幸福・対話・市民性』明石書店
※参考文献に関しては、必要に応じて授業で紹介する。

前期課程 2期　日本語教育学研究 Ⅶ　データ分析法

籠宮　隆之

授業概要並びに到達目標

総合研究Ⅱ（量的研究法）に引き続き、文科系の大学院生を対象とした、統計学の授業である。
本講座では、フリーの統計ソフトである「R」を用いた統計処理を学ぶ。
また、多変量解析を用いたデータ解析手法についても学ぶ。
講義科目ではあるが、コンピュータを用いた実習形式を交えて授業を進める予定である。
なお、総合研究Ⅱ（量的研究法）と併せて受講することが望ましい。

授業計画

以下の項目について、受講者の進度と関心に合わせ、取捨選択しながら授業を進める。
（15コマ）
1．総合研究Ⅱ（量的研究法）の復習（記述統計）
2．総合研究Ⅱ（量的研究法）の復習（統計的検定）
3．二元配置分散分析
4．相関係数の有意性検定と統計的検定における効果量
5．統計ソフトＲの基本的な使い方（プログラム言語の基礎概念を含む）
6．統計ソフトＲを用いた統計的検定（t 検定）
7．統計ソフトＲを用いた統計的検定（分散分析と多重比較）
8．回帰分析の基礎
9．統計ソフトＲを用いた回帰分析（単回帰分析、重回帰分析、変数選択）
10．統計ソフトＲを用いた様々な回帰分析（非線形回帰分析）
11．統計ソフトＲを用いた多変量解析（主成分分析）
12．統計ソフトＲを用いた多変量解析（因子分析）
13．統計ソフトＲを用いた多変量解析（判別分析）
14．受講者自身の研究テーマに則った実習１（※オンライン形式で開講）
15．受講者自身の研究テーマに則った実習２

成績評価基準

受講者各自の研究テーマに則って統計的な分析を行ったレポートにより評価する。

教科書（参考書）

教科書：
栗原伸一（2021）『入門　統計学（第２版）検定から多変量解析・実験計画法・ベイズ統計学まで』、オーム社
山田剛史・杉澤武俊・村井潤一郎（2008）『R によるやさしい統計学』、オーム社
参考書：
金明哲（2007）『R によるデータサイエンス - データ解析の基礎から最新手法まで』、森北出版

前期課程 1期　日本文化研究 Ⅰ　日本文化論

齋藤　絢

授業概要並びに到達目標

【授業概要並びに到達目標】
本講義は国際文化論を手法とし、文化理論の基礎と理論の発展過程について学ぶことを目的とする。特に「文化接触」「文化変容」の理論については東アジア地域の文化関係を主体に社会的課題点を挙げ、日本と他の国・地域に跨る文化的諸問題について考察をおこなう。

【授業方法】
・使用ツール：Google classroom
・講義、文献購読、ディスカッションを中心として講義を進めていく。

授業計画

第１回　授業の概要説明と各週のスケジュール確認、受講者の学習背景
第２～４回　文化的諸要素に関する概念
①文化の概念
②文化概念に関する文献講読－１
③文化概念に関する文献後続－２
第５回　「ことばと文化」「言語と文化」(3)　文献紹介、ディスカッション　文化の視野を広げる
第６回　文献講読(1)　第２章「国際関係における文化」
国際関係における文化：平野健一郎(2000)『国際文化論』東京大学出版会
第７回　文献講読(2)　第３章「文化の変化」
１．内発的変化と外発的変化
２．文化進化論
第８回　文献講読(3)
３．文化変容論
第４章「文化の接触と変容－文化触変」
１．アカルチュレーン研究の登場
第９回　文献講読(4)
２．外来文化要素の伝播と選択
３．文化運搬者
第10回　講義「日本の近代化と異文化接触」
第11回　プレゼンテーションに向けて(1)
日本文化をテーマとし、文化触変についてプレゼンテーションをおこなう(報告＋ディスカッション)
例)ことば･言語･生活文化･文化芸術活動･大衆文化･信仰／宗教など、テーマを軸にグループを組む
プレゼンテーションの趣旨：文化に対する複眼的な視野と知識を共有し、日本社会・日本文化に対する思考を深めていくためのグループ内ディスカッション、また全体のディスカッションの活性化を目指したい。
第12回　「主要文献の収集状況の確認、テーマの具体化」
考察ポイントについてのディスカッション
第13回　「PPT、配布資料の準備、質疑応答の準備」
第14回　「プレゼンテーション(1)」(オンライン)
報告時間：30分
論点の整理とディスカッションの準備(10分)
ディスカッション：40分
フィードバック：10分
第15回　「プレゼンテーション(2)」「全体のまとめ」
報告時間：30分
論点の整理とディスカッションの準備(10分)
ディスカッション：30分　フィードバック：10分

成績評価基準

課題20％、文献講読20％、プレゼンテーション30％、レポート30％

教科書(参考書)

授業内容に応じて参考文献を紹介し、資料を配布する。

前期課程 2期　日本文化研究 Ⅱ　日本文化論

齋藤　絢

授業概要並びに到達目標

地理的に日本と朝鮮半島の歴史的関係は深く、日韓関係、日朝関係には常に変化が伴う。特に現代社会での課題の多くに近代に生じた政治的・社会的・文化的問題が関係しており、個と集団の狭間にある多元的な文化的課題を解決することは容易ではない。本講義では日本と朝鮮半島を主体とする東アジアの文化関係を取り上げ、日韓の社会的課題点を捉え、考察の手法・知識を習得することを目標とする。とりわけ日韓大衆文化に関する両国の文化政策と文化交流の現場を中心に、どのように両国が文化的関係性を構築してきたのかを考察する。講義では日本語・韓国語文献の収集と講読をおこない、ディスカッションを通じて受講者間の考察の視点を学んでいく。

授業計画

各週学習テーマ
第１回　授業の概要説明と各週のスケジュール確認、受講者の学習背景
第２回　文化の理論、日韓文化関係
第３回　大衆社会と文化１－大衆文化(講義)
第４回　大衆社会と文化２－映像の視聴(1)
第５回　大衆社会と文化３－映像の視聴(2)
第６回　大衆文化論に関する文献講読：学習者１
文化論／異文化接触／大衆文化を中心とした学術分野のなかで学習者の研究テーマに関連した文献を選択し、文献紹介・ディスカッションのテーマ共有を中心に授業を展開する。
第７回　大衆文化論に関する文献講読：〃
第８回　大衆文化論に関する文献講読：学習者２
第９回　大衆文化論に関する文献講読：〃
第10回　大衆文化論に関する文献講読：学習者３
第11回　大衆文化論に関する文献講読：〃
第12回　大衆文化論に関する文献講読：学習者４
第13回　大衆文化論に関する文献講読：〃
第14回　日韓文化関係についてディスカッション―戦後の日韓関係と文化政策、日流・韓流(オンライン)
第15回　全体のまとめ

成績評価基準

各回授業参加への積極性…30％
文献講読(文献紹介、小発表の質、議論の質)…40％
レポート…30％

教科書(参考書)

講義内容に応じて参考文献を紹介し、資料を配布する。

前期課程 1期 日本文化研究 Ⅲ
日本文学研究

エリス　俊子

授業概要並びに到達目標
文学を読む

文学とは何か。文学言語とは？
文学を読むとはどのような体験か。文学を批評するとはどのような行為か。

文学をめぐる基本的な問いについて、考える。
人間が文字を使いはじめて以来、文学作品は編まれつづけてきた。そして情報が氾濫する現代社会にあっても文学が衰える気配はない。
文学作品を読むという経験そのものについて、具体的な作品をとり上げながらディスカッションを行う。

希望があれば、映画や美術など、文学以外の表現芸術についても触れたいと思う。

予備知識不要。

文学をまったく読んだことのない人、文学に詳しい人、共に歓迎します。
多様なバックグラウンドと関心をもつ参加者が一緒に読むことによってさまざまな発見があると思います。

授業計画
参加学生と相談の上、適宜変更する。
1　導入
2　文学言語について
3　文学の読み方
4　俳句
5　和歌
6　近代詩
7　小説
8　批評の方法（1）
9　批評の方法（2）
10　比較文学
11　文学と美術
12　文学と映画
13　研究発表 1
14　研究発表 2（オンライン）
15　研究発表 3

成績評価基準
授業参加とレポートの総合評価

教科書（参考書）
適宜指示する。

前期課程 2期 日本文化研究 Ⅳ
日本文学研究

エリス　俊子

授業概要並びに到達目標
第１期に続き、文学およびその隣接領域を主テーマとして授業を行うが、今学期は、参加学生の個人研究ないし個人的な関心についても発表してもらう機会を設ける。研究関心を共有することで、お互いの研究の視野を広げ、新たな発想を得たり、自身の研究を深めるきっかけができることを願っている。

共同作業を行う回のほかは、それぞれの主要な関心について発表してもらい、参加者全員がコメントするかたちで議論を進める。授業への積極的な参加を期待する。

なお、授業計画については、参加者の関心に配慮し、適宜修正する。

授業は対面形式で行うが、第14週のみオンラインで行う。

授業計画
1．第１期を振り返って
2．私の研究関心（1）
3．私の研究関心（2）
4．私の研究関心（3）
5．共同テクスト分析―映画（小津安二郎「東京物語」あるいは他の作品）
6．共同テクスト分析―美術
7．共同テクスト分析―小説
8．共同テクスト分析―詩
9．研究発表（1）
10．研究発表（2）
11．研究発表（3）
12．研究の方法―さまざまな分析の仕方
13．研究の方法―論文の書き方
14．個別指導
15．総合討論

成績評価基準
授業参加とレポートの総合評価

教科書（参考書）
適宜指示する。

前期課程 1期 グローバルスタディーズ研究 Ⅱ
国際マクロ経済とグローバルビジネス

複数教員制　　真家　陽一、林　慶雲

授業概要並びに到達目標
日本経済のグローバル化が進展する中、国際マクロ経済およびグローバルビジネスを学ぶ重要性が高まっている状況を踏ま

え、マクロ・ミクロの両面から国際マクロ経済およびグローバルビジネスに関する理解を深めることを目指す。
前半の講義では、国際マクロ経済学について学んでいく。具体的には、日本経済との結びつきが強いいくつかの国・地域をピックアップし、その国の経済事情やビジネス慣行、代表的な企業のグローバル経営についてケーススタディを行う。後半の講義では、世界第２位の経済大国であり、日本との経済関係も緊密な「中国」とのビジネスを中心に、ケーススタディを行う。本講義は学生の主体的かつ積極的な参加を強く求めるため、履修前に経済・ビジネスに関する十分な知識を習得済みであることが望ましい。今年度は原則として対面による授業を実施する。ただし、第14回はオンラインとする。

授業計画

１回　オリエンテーション（林、真家）
２回　アメリカの経済事情（林）
３回　Southwest Airline の企業経営（林）
４回　Walt Disney の企業経営（林）
５回　Starbucks の企業経営（林）
６回　ASEAN の経済事情（林）
７回　インドの経済事情（林）
８回　オーストラリアの経済事情（林）
９回　ケーススタディ①（概論、自動車）（真家）
10回　ケーススタディ②（電機）（真家）
11回　ケーススタディ③（化学、医薬）（真家）
12回　ケーススタディ④（卸売・小売①スーパー・コンビニ）（真家）
13回　ケーススタディ⑤（卸売・小売②アパレル・生活用品）（真家）
14回　ケーススタディ⑥（食料品）（真家）
15回　課題演習と後半の授業のまとめ（真家）

成績評価基準

前半の講義は、毎回の講義で簡単な感想文を書いてもらい、前期のレポートを提出することを求める。感想文及びレポートに基づいて評価する。
後半の講義は、毎回の講義に基づく学生からと発表と討論への取り組み状況および課題演習などによって総合的に評価する。

教科書（参考書）

前後半の講義とも、教科書は使用せず、プリントを配布する。

前期課程 2期 | グローバルスタディーズ研究 Ⅲ 国際政治・紛争・平和構築

堀部　純子

授業概要並びに到達目標

【授業概要（主要テーマ）】
国際政治に関する理論及び紛争・平和構築に関する主要な概念を概観し、世界の紛争・平和構築の現状と課題について理論的な視座から主に英語文献を用いて考察・議論する。近年の紛争事例を取り上げ、理論を用いて分析を行い、紛争原因を考察し解決に向けた示唆を得る。履修にあたっては国際政治学、国際関係論の学部レベルの知識を既得していること。

【到達目標】
国際政治に関する理論及び紛争・平和構築に関する最新の議論を理解するとともに、批判的思考を用いて議論する力を養う
学術的専門文献（英語）を読解する力を身に付け、能力を養う

【準備学習の具体的な学修内容】
課題文献の読み込み、論点整理、鍵概念等の理解【150分】
振り返り【30分】
発表担当者はレジュメを作成し、予習テキストの内容、その解釈、疑問点などを発表する。

授業計画

第１回　オリエンテーション
第２回　国際政治における紛争と協調
第３回　国際政治と倫理
第４回　紛争と協調に関する理論
第５回　３つの分析レベル（個人・国家・システム）を用いた実践
第６回　歴史的・理論的考察―ウェストファリア体制から第一次世界大戦
第７回　集団安全保障体制と第二次世界大戦
第８回　歴史的・理論的考察―冷戦
第９回　歴史的・理論的考察―冷戦と核兵器
第10回　冷戦終結後の紛争と協調―紛争管理
第11回　冷戦終結後の紛争と協調―多国籍軍と平和維持
第12回　冷戦終結後の紛争と協調―人道的介入、保護する責任
第13回　人道的介入事例分析・議論
第14回　多極化世界における平和の維持（オンライン開講）
第15回　まとめ 期末レポート提出

成績評価基準

授業での発言・議論参加・発表：50％
期末レポート：50％
合計：100％

教科書（参考書）

授業内で適宜指示・配布する。

前期課程 2期（集中） | グローバルスタディーズ研究 Ⅳ 公共政策とガバナンス

平山　恵

授業概要並びに到達目標

公共政策の理論に関する文献購読を行いながら、学生に身近な課題についての政策策定手法の模擬演習を行う。
公共政策関連の専門知識を得るとともに、政策的思考を行うことができる能力を得ることを目的とする。

授業計画

1．「公共政策」とは何か
2．国際公共政性
3．演習：理念設定
4～5．政策の決定
6．演習：現状把握
7．課題別政策：安全保障
8～9．政策の決定
10. 演習：未来予測
11. 安全保障
12. 地球環境
13. 演習：方策設定
14. 学生の発表
15. 総括

成績評価基準

輪読分担及び討論を通した知識理解 40%、政策手法演習 40%、政策分析発表および他の学生へのコメント 20%

教科書(参考書)

庄司真理子、宮脇昇、玉井雅隆 編著『新グローバル公共政策』晃洋書房 2021

前期課程 1期(集中) グローバルスタディーズ研究 V 国際社会と国際法

山形　英郎

授業概要並びに到達目標

国際社会の平和と安全を維持するために国際連合が設立された。国際連合憲章は、武力行使を禁止し、集団安全保障体制を導入し、国際平和を維持する制度を構築した。しかし、現実には、国連創設以来武力行使の事例は枚挙にいとまがない。国際法の基本原則である武力行使禁止原則を中心に、国連安全保障体制について理解し、現実に生起している武力紛争について国連憲章を正しく適用することができる能力を身につける。その上で、国際法を通して国際社会の実態を分析することができるようになることを目標とする。
毎回、参加者との対話を通じて授業を進めていく。講義を行うが、受講する学生から随時質問を受け付け、回答を行う。疑問点を残さないよう授業を進めていきたい。

授業計画

01. 国際法の基礎を学び、国連集団安全保障体制を概観する。
02. 国際連盟の集団安全保障体制を理解し問題点を分析する。
03. 国際法上の基本原則である武力行使禁止原則を解剖する。
04. 武力行使禁止原則の例外である自衛権について検討する。
05. 個別的自衛権と集団的自衛権発動の要件を比較検討する。
06. 主権平等から導き出される不干渉原則を理解し運用する。
07. 国連憲章第6章における平和的紛争解決制度を概観する。
08. 国連安保理及び総会における決定手続きを十分理解する。
09. 冷戦期における安保理麻痺に対する対処方法を研究する。
10. 平和維持活動が第6章半の措置と呼ばれる理由はなにか。
11. 安全保障理事会が制裁措置を執るのはどのような場合か。
12. 安全保障理事会が軍事的強制措置を執るための要件とは。
13. 軍をもたない国連が軍事的強制措置を執るにはどうする。
14. 非軍事的強制措置の実態を検証し法的問題点を洗い出す。
15. 以上の検討を踏まえ、国連は国際法の主体であるか否か。

成績評価基準

国際法や国連憲章に関する基礎的な知識を得ることができれば合格(C)。その知識を具体的な事例に適用することができれば(B)。国家間あるいは研究者の間で意見が相違する対立点を理解し、どうした背景からそのような相違が生じてているのかを理解した上で、自己の見解を提示できれば(A)。授業での報告及びレポートから判断する。

教科書(参考書)

David Harris and Sandesh Sivakumaran ed., Cases and Materials on International Law 8th ed., Sweet & Maxwell (2015).
ただし購入の必要はない。
参考書として、松井芳郎『武力行使禁止原則の歴史と現状』日本評論社(2018)、山形英郎編『国際法入門』(第3版)法律文化社(2021年)。

前期課程 1期(集中) グローバルスタディーズ研究 VI 開発とグローバルイシュー

佐藤　都喜子

授業概要並びに到達目標

授業概要：
「持続可能な開発」に関わるグローバル・イッシューのホット・トピックを論じると共に、「国際協力」や開発論の軌跡について理学習する。国際協力の専門家として約25年間に渡って現場で働いた講師の経験を基に、臨場感ある授業を進める。オンラインではあるが、ゲスト・スピーカーとして、プラン・インターナショナルの理事長を務める池上清子氏を迎える予定である。

到達目標：
「持続可能な開発」とそれに関わるグローバル・イシュ―についての理解を深める。

準備学習：
1．次回の授業に関する指定資料を読んで、概要をまとめておくこと(週180分以上)
2．授業を振り返りながら、授業のテーマに関する推薦図書を読む(週180分以上)

授業計画

第1回：オリエンテーション、開発のアクター(ODA・二国間援助)
第2回：開発のアクター(国際機関)
第3回：SDGsとは何か？　政府、企業、自治体、生活者の視

点からのSDGs
第４回：北野収(2017)『国際協力の誕生』２章、４章　プレゼン
第５回：北野収(2017)『国際協力の誕生』６章、７章　プレゼン
第６回：北野収(2017)『国際協力の誕生』８章　プレゼン
第７回：1. さまざまな開発論と戦後の開発論の変遷、2. 援助潮流の変化と今後の展望
第８回：トピック１：グローバリゼーションと開発(英文)輪読
第９回：事例：マレーシアの零細漁民　【討議】
第10回：トピック２：ジェンダーと開発①　事例～バングラディッシュ女性の現状　【討議】
第11回：ジェンダーと開発②：女性のエンパワメントへの道のり
第12回：ジェンダーと開発③：ジェンダーと開発(英文)輪読
第13回：ジェンダーと開発④：分析手法
第14回：ジェンダーと開発⑤：ゲスト・スピーカー：池上清子(プラン・インターナショナル理事長)
第15回：ジェンダーと開発⑥：事例～ケニアの移住女性が直面する問題～

成績評価基準

授業姿勢　(50点)
発表　　(50点)

教科書(参考書)

授業内で使う書籍：
北野収(2017)『国際協力の誕生―開発の脱政治化を超えて―』創成社
参考図書：
南博、稲葉雅紀(2020)『SDGs―危機の時代の羅針盤』岩波新書
田中由美子、甲斐田きよみ、高松香奈(2017)『はじめてのジェンダーと開発』新水社

前期課程 1期 ワールドヒューマニティズ研究 I グローバルヒストリー研究

鈴木　茂

授業概要並びに到達目標

新しいマイノリティ論によって注目を集めているJustin Gest(ジャスティン・ゲスト)のMajority Minority(New York: Oxford University Press, 2022)を輪読します。
米州(ニューヨーク、トリニダード・トバゴ)、中東(バーレーン)。インド洋(モーリシャス)、東南アジア(シンガポール)、太平洋(ハワイ)のうちから選んだ章を読み、日本との比較を意識して、マイノリティー論のグローバルな展開を理解することが目標です。
合わせて、学術論文の形式、文体、語彙に慣れることも目標とします。

授業計画

具体的な事例とし挙げられている米州(ニューヨーク、トリニダード・トバゴ)、中東(バーレーン)。インド洋(モーリシャス)、東南アジア(シンガポール)、太平洋(ハワイ)から受講者と相談して決めます。毎回、受講者に内容の要約を中心とする報告をお願いし、討論を行います。
第１回　イントリダクション(講義)
第２回　報告と討論１
第３回　報告と討論２
第４回　報告と討論３
第５回　報告と討論４
第６回　報告と討論５
第７回　報告と討論６
第８回　報告と討論７
第９回　報告と討論８
第10回　報告と討論９
第11回　報告と討論10
第12回　報告と討論11
第13回　報告と討論12
第14回　報告と討論13(オンライン)
第15回　まとめ

成績評価基準

平常点で評価します。

教科書(参考書)

Justin Gest, Majority Minority (New York: Oxford University Press, 2022).
こちらで用意します。
参考書：ジャスティン・ゲスト『新たなマイノリティの誕生：声を奪われた白人労働者たち』弘文堂、2019年

前期課程 1期(集中) ワールドヒューマニティズ研究 II 多言語多文化研究

奈良　雅美

授業概要並びに到達目標

グローバリゼーションの拡大と深化とともに変容を続ける世界において、多様な文化と言語の人々があるいは多様な主体が影響を及ぼし合っている。この授業では、これらの事象を重層的で動的な関係性として捉え、「多文化社会」をより深く理解できるよう、分析視点を広げる。
コースの前半は、国際文化論、国際社会論の視点から、「多文化社会」を位置付けて解説する。後半では、日本の多文化社会をジェンダーの視点から捉え、グローバリゼーションの中で、多文化共生がジェンダー平等とどう融合しうるのかを考える。
授業の目標は、第一に「多言語・多文化」に係る事象を俯瞰して理解する力を養うこと、第二に、多言語・多文化の社会の諸課題をジェンダーの視点で理解できるようになることである。

授業計画

1　授業の概要、進め方、授業意図のバックグラウンドの説明など
2　国際文化論からの考察①文化とはなにか

3　国際文化論からの考察②グローバル化の中の文化
4　国際文化論からの考察③文化の変化
5　国際文化論からの考察④文化の接触と変容
6　国際文化論からの考察⑤文化の受容と抵抗
7　国際文化論からの考察⑥人の国際移動
8　ジェンダーとはなにか
9　ジェンダーと多文化共生①ジェンダー平等との連関性
10　ジェンダーと多文化共生②対立あるいは変容
11　ジェンダーと多文化共生③複合差別
12　事例：日本に住むフィリピン女性のライフヒストリーを読む（教科書指定『そうしてサンパギータは神戸にいる』より）
13　事例：日本に住むフィリピン女性のライフヒストリーを読む（同上）
14　事例：日本に住むフィリピン女性のライフヒストリーを読む（同上）
15　全体の振り返りとディスカッション
＊授業の進行状況により順番を入れ替えたり、内容を変更する場合もある。

成績評価基準

平常点40%（ディスカッションでの意見、対話の状況から）
レポート60%（最終回で課題を提示する）

教科書（参考書）

教科書
奈良雅美『そうしてサンパギータは神戸にいる』金木犀舎、2025年

参考文献
平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000年
関根政美『エスニシティの政治学』名古屋大学出版会、1994年
辻村みよ子・大沢真里編『ジェンダー平等と多文化共生』東北大学出版会、2010年

前期課程 2期　ワールドヒューマニティズ研究 Ⅲ 宗教・民族・エスニシティ

髙村　美也子

授業概要並びに到達目標

この授業では、エスノグラフィーおよび人類学の手法を用いて、世界の宗教、民族、エスニシティの概念を学び、アフリカおよびヨーロッパを中心とした各地域の社会の実態を学ぶ。
15回の講義を通し、世界で起こっている社会の現状と問題を発見し、それをどのように捉えていくか考察する。
受講生は、世界で起こっている民族問題について、日ごろから着目しておく。
講義、ディスカッション、映像視聴、講読および発表、レポート執筆を実施する。
レポートに関しては、各受講生が注目している地域の民族について執筆する。

授業計画

1　講義内容の説明と計画
2　世界の民族とエスニシティ
3　国家、国民、民族
4　世界の言語
5　世界の宗教１　文明と３大宗教
6　世界の宗教２　人類学で扱われる宗教
7　民族の土着信仰、慣習
8　大航海時代から現在の人の移動
9　ディアスポラの人びとの暮らし
10　宗教・民族・エスニシティ（発表）①
11　宗教・民族・エスニシティ（発表）②
12　宗教・民族・エスニシティ（発表）③
13　宗教・民族・エスニシティ（発表）④
14　移住先での宗教実践　オンライン
15　宗教・民族・エスニシティ（発表）⑤

成績評価基準

課題・レポート　40%
平常点（各講義課題への対応状況）　60%

教科書（参考書）

なし　随時配布

前期課程 2期　ワールドヒューマニティズ研究 Ⅳ 世界文化と表象

長畑　明利

授業概要並びに到達目標

・英語圏のモダニズムとその後の革新的な文学（innovative literature）に見られる翻訳と外国語の使用について考察する。
・到達目標は、①英語圏のモダニズムとその後の革新的な文学（innovative literature）について解説ができること、②革新的な文学に見られる翻訳と外国語使用の諸例について解説ができること、また、その意味について考えを述べることができること、③革新的文学および関連文献の英語に習熟することである。
・各回の授業は講義と担当者による報告および議論により進める。担当者はリーディング課題について、作品・作者紹介、翻訳と外国語使用についての考察、自分なりの論点を含む報告を行い、質問に答える。その際、必要に応じて、ハンドアウトまたはスライドを用意する。担当者以外の受講者はリーディング課題を読んだ上で授業に出席し、議論に加わる。

授業計画

・導入に続く14回の授業で以下のトピックとテクストを扱う計画である。和訳のあるものについては、英語テクストに加え、和訳も参考にする。第14回の授業はオンラインで実施する。

第１回　導入

第２回　Modernism について
第３回　Ezra Pound による Bertrand de Born、Bernart de Ventadorn の詩の翻訳
第４回　Ezra Pound, Cathay
第５回　Ezra Pound, Awoi no Uye
第６回　Ezra Pound, “Canto I”; “Canto IV”
第７回　T. S. Eliot, The Waste Land
第８回　Basil Bunting, “Chomei at Toyama”
第９回　Gary Snyder, “Miyazawa Kenji” (The Back Country)
第10回　Kenneth Rexroth, The Love Poems of Marichiko
第11回　Rosemarie Waldrop, A Key into the Language of America
第12回　Caroline Bergvall, “Via”
第13回　Theresa Hak kyung Cha, Dictee
第14回　Yoko Tawada, “St. George and the Translator”
第15回　最終発表

(＊)扱うトピックまたはテクストを変更することがある。

成績評価基準

授業点60%、期末レポート40%。60点以上を合格とする。５回以上欠席した場合、単位取得の意思がないものとする。

教科書(参考書)

教科書：自主教材
参考書：
・Baker, Mona, ed. Critical Readings in Translation Studies. New York: Routledge, 2010.
・Venuti, Lawrence, ed. The Translation Studies Reader, 2nd ed. New York: Routledge, 2004.
・Yao, Steven G. Translation and the Languages of modernism: Gender, “Politics,” Language. New York: Palgrave, 2002.
・その他、授業中に紹介する。

前期課程 1期　ワールドヒューマニティズ研究 V　世界文学と批評

木村　茂雄

授業概要並びに到達目標

世界の英語文学の解釈や批評について学んでいきます。カリブ、アフリカ、インドなどの英語圏の作家や、日系アメリカ人作家の短編小説を取り上げます。これらの作品を、歴史、社会、文化、人種・民族、ジェンダーなど、さまざまな視点から検討することによって、文学作品だけでなく、広い意味での文化的なテクストを解釈し、批評する力を身につけていきます。受講生は、授業で取り上げるテクストを丁寧に予習して授業に臨みます。授業では作品の内容、解釈、疑問点などについてディスカッションしていきます。このような学習をとおして、修士論文執筆のための批評力を深めていきます。

授業計画

第１回　ガイダンス
第２回　Jean Rhys, “The Day They Burned the Books”
第３回　V.S. Naipaul, “The Baker’s Story” ①
第４回　V.S. Naipaul, “The Baker’s Story” ②
第５回　Ngugi wa Thiong’o, “A Meeting in the Dark” ①
第６回　Ngugi wa Thiong’o, “A Meeting in the Dark” ②
第７回　Abioseh Nicol, “The Truly Married Man” ①
第８回　Abioseh Nicol, “The Truly Married Man” ②
第９回　Saadat Hasan Manto, “Toba Tek Singh” ①
第10回　Saadat Hasan Manto, “Toba Tek Singh” ②
第11回　Hisaye Yamamoto, “The Streaming Tears”
第12回　Violet Harada, “The Shell Gatherer”
第13回　Dean Takehara, “Counting Song” ①
第14回　(オンライン)Dean Takehara, “Counting Song” ②
第15回　まとめ、学期末レポートの準備

成績評価基準

発表など授業への取り組み 60%、学期末レポート 40%

教科書(参考書)

教材はプリントで配布します。参考書は適宜授業で示します。

前期課程 2期　ワールドヒューマニティズ研究 VI　トランスレーション研究

甲斐　清高

授業概要並びに到達目標

「文芸翻訳の理論と実践」
この授業は、翻訳という行為にともなう諸問題を検討しながら、英語で書かれた文学作品を日本語に翻訳する、という実践を経験することを通して、実践的な翻訳力を身につけていくことを目的とする。単に英文を日本語で解釈するのではなく、実際の「翻訳」とはどのようなものかを意識的に考察していく。文芸翻訳の特殊性を理解するために、他のジャンルのテキストも翻訳の題材とする。授業の中、および課外で、文学作品の翻訳を進めていき、最終的にレポートを添えて翻訳作品を提出する。
受講者は、毎週与えられる翻訳課題を完成させて、次の授業にのぞまなければならない。
授業は、対面で行うが、資料の配布や課題の提出等は、Google Classroom から行う。
第14週は、Zoom を使ってオンラインでの授業となる。

授業計画

第１週　イントロダクション：翻訳とは何か
第２週　直訳と意訳
第３週　辞書やその他のツールの活用
第４週　語句の意味と翻訳
第５週　起点テキストの種類、翻訳の目的
第６週　翻訳実践(省略)
第７週　翻訳実践(品詞の転換)

第８週　翻訳実践(順送りと逆送り)
第９週　翻訳実践(複雑な文への対応)
第10週　翻訳実践(話法)
第11週　翻訳実践(無生物主語、態)
第12週　翻訳実践(文化の違い)
第13週　翻訳実践(表記の問題)
第14週　翻訳実践(推敲)[オンライン]
第15週　まとめ

成績評価基準

授業内での取り組み40%、翻訳作品とレポート60%。

教科書(参考書)

プリント配布。

前期課程 1期 ワールドヒューマニティズ研究 Ⅶ 世界の宗教と文化

八木　久美子

授業概要並びに到達目標

・日本を含め、複数の異なる地域および宗教の事例を見ることで、宗教研究のさまざまな手法について学ぶと同時に、宗教を手掛かりにして社会の変容について考察する可能性についても理解することを目的とする。

・『現代社会を宗教文化で読み解く：比較と歴史からの接近』のなかから、毎回ひとつの章を選んで読んでいく予定である。毎回、ひとりの担当者にその内容について発表してもらい、そのあと全員でディスカッションをおこなう。ただし、参加者の研究テーマ、関心によって、他の文献を取り上げるなど適宜、対応する。

・授業の前に資料を丁寧に読み、ディスカッションで提起したい点について確認しておくこと、また授業後には、自らの研究テーマに引き付けて、その日の議論のポイントを整理しておくことが必要である。

授業計画

1）オリエンテーション
2）受講者発表：研究テーマの共有
3）一章　日本の神々はどう描かれてきたのか
4）二章　葬式仏教の時代は終わったか
5）三章　宗教は性別を問わないか
6）四章　宗教は自分らしさを奪うか
7）「イスラムの衣食の規範」
8）五章　宗教は会社に指針を与えるか
9）六章　宗教と世俗はどう共存しているか
10）七章　宗教とツーリズムはなぜ結びつくのか
11）「イスラムの巡礼」
12）八章　キリスト教は社会運動をなぜ支援するのか
13）九章　カルト宗教はなにが問題なのか
14）[オンライン]十章　宗教文化をどう捉えなおすか
15）受講者発表：研究の進捗についての発表

成績評価基準

・成績は、授業での発表およびディスカッションへの貢献によって評価する。

教科書(参考書)

櫻井義秀・平藤喜久子編著『現代社会を宗教文化で読み解く―比較と歴史からの接近』ミネルヴァ書房、2022年

前期課程 1期 情報コミュニケーション研究 Ⅰ ジャーナリズム・メディア論

鶴本　花織

授業概要並びに到達目標

映画・広告・漫画などのビジュアルテキストを研究資料としてどう扱うべきかが特に20世紀後半以降に学問的に議論された。その結果として考案された分析方法を「記号学分析」と呼ぶが、この授業では、記号学分析の手法を教授するとともに、フェミニズム映画理論の中でとりわけ開発が進んだ精神分析学的映画理論に特化して授業を運営する。
ビジュアルテキストを用いて研究を進めることを視野に入れている場合は、この授業を受けると良いだろう。
授業では、映画をネタにした記号学分析の実演を教員が行ったり、教員が選んだ映画をネタにグループ・ディスカッションをしたりする。また、受講生が選んだ映画を用いて個人発表を行い、学習成果を示す。

授業計画

〈導入〉
1．オリエンテーション：記号学分析とは
2．記号学分析の基礎：ノーノー・ボーイの表象
3．記号学分析の基礎：ティーン・フリックの表象
〈ホラー映画〉
4．ローラ・マルヴィ「視覚的快楽と物語映画」(1975)について
5．バーバラ・クリード「Horror and the Archaic Mother: Alien」
6．ブラッハ・L・エッティンガー『Matrixial Gaze』(1995)について／事例映画：『羊たちの沈黙』(1991)
〈現代家族〉
7．『ジョーカー』2019の記号学分析
8．『パラサイト半地下の家族』2019のディスカッション
〈戦争映画〉
9．反戦映画に関するディスカッション／事例映画：『西部戦線異状なし』2022
〈救世主としての女性〉
10．『プロミシング・ヤング・ウーマン』2020
11．『ラブリー・ボーン』2009
12．学生お薦め作品
13．学生お薦め作品

14. 学生お薦め作品(オンライン)
15. 学生お薦め作品

成績評価基準

グループ・ディスカッションおよび個人発表

教科書(参考書)

クラスルームにデジタル版を挙げる

前期課程 2期 情報コミュニケーション研究 Ⅳ スピーチ・プレゼンテーション

Alessandro G. Gerevini

授業概要並びに到達目標

魅力的なスピーチやプレゼンテーションの力を身につける科目です。日本語、あるいは英語によるスピーチ・プレゼンテーションを実践的な形で指導します。話し方、姿勢、ジェスチャー、観客への視線、間の取り方、服装などのノン・バーバル・コミュニケーションと、発声・滑舌、話の速度、話の流れの中で協調すべきところなどのバーバル・コミュニケーションの両者に関するスキルアップを目指します。演劇学校などで用いられる実習も取り入れる予定ですので、学生の積極的な参加が期待されます。

準備学習時間：180分

履修者の自己紹介の指導から始まる予定ですので、初回まで数分程度のスピーチを準備してください。

授業実施方法：第１～13週間及び最終回の第15週間の授業は対面で行います。しかし第14週間はオンライン方式(リアルタイム双方向性型)で行う予定です。

授業計画

初回の後、特に優れたスピーチを例として扱いながら、重要なポイントや構成パターンを徹底的に分析します。即興のスピーチを練習する目的でも、履修者全員にウタ・ハーゲン氏の、観客への視線の大切さを学ぶ実習をしてもらう。そして各自で準備したスピーチやプレゼンテーションを発表してもらう。その内容に関しては特に決まりはなく、参加予定のスピーチコンテストの原稿でも、他の授業中に発表する予定のプレゼンテーションでもどれでも結構です。使用言語は日本語もしくは英語、どちらでも可能です。各自のプレゼンテーションのテーマについての指導はしないものの、その内容が観客に理解されているか、また魅力的な形で届けられているかを確認します。学期末の試験では授業中で既に発表したスピーチやプレゼンテーションの「決定版」を評価します。履修者数によって、授業計画全体の微調整もあり得る。

第１回　コース・オリエンテーション、学生の自己紹介
第２回　国内外のスピーチ・プレゼンテーション観賞とその分析①
第３回　国内外のスピーチ・プレゼンテーション観賞とその分析②
第４回　ウタ・ハーゲン氏の実習①
第５回　ウタ・ハーゲン氏の実習②
第６回　インプロビゼーション(即興)の実習
第７回　ブリーフィング(グループ別指導)
第８回　学生のスピーチ・プレゼンテーション１(グループ A)
第９回　学生のスピーチ・プレゼンテーション１(グループ B)
第10回　学生のスピーチ・プレゼンテーション１(グループ C)
第11回　ブリーフィング(個人指導)
第12回　学生のスピーチ・プレゼンテーション２(個人 A)
第13回　学生のスピーチ・プレゼンテーション２(個人 B)
第14回　(オンライン方式)
学生のスピーチ・プレゼンテーション２(個人 C)
第15回　まとめ

成績評価基準

授業参加における積極的な態度　30％
スピーチ・プレゼンテーションの練習　40％
期末試験　30％

教科書(参考書)

教科書は使用しません。
必要に応じて教員がプリントを配付します。
参考書:ウタ・ハーゲン著、シカ・マッケンジー訳『“役を生きる”演技レッスン―リスペクト・フォー・アクティング』フィルムアート社、2010

前期課程 2期 情報コミュニケーション研究 Ⅴ 英語通訳スキル

浅野　輝子

授業概要並びに到達目標

国際社会で活躍できる通訳 基礎知識からトレーニング法まで

１：このクラスは、通訳の基礎理論を習得した後、逐次、同時通訳ができるまでの能力を養成することを目的とした通訳コースである。
２：名古屋外国語大学主催で毎年開催している「全国学生通訳コンテスト」のスクリプトをまとめた「通訳ワークブック」をテキストに、多文化社会の現場での逐次通訳スキルを音声教材を用いて指導する。
３：国際化が進むにつれて、異文化コミュニケーターとしての通訳の需要は年々高まってきている。このコース終了後、学生が国際会議などのボランティア通訳、ガイド通訳エスコート通訳として活躍できるようになる事。

基本は日進キャンパスの E30同時通訳室にて対面で行いますが、14回目の授業はオンライン(Zoom)で行います。

授業計画

第１回　履修に関するガイダンス・オリエンテーション　通訳とは（通訳基礎理論）
第２回　用語の整理ー移民とは
第３回　国際移民の歴史
第４回　人口統計と移民
第５回　日本人移民史
第６回　移民による文化的影響とアイデンティティ
第７回　移民政策
第８回　移民と経済
第９回　移民と教育
第10回　移民と庇護希望者
第11回　非正規移民問題
第12回　移民とシティズンシップ
第13回　移民と国際機関
第14回　多文化社会としての日本（オンライン）
第15回　まとめ

成績評価基準

授業中の通訳訓練および態度、宿題の評価を全体の40％、通訳実技を60％とする。

教科書（参考書）

「世界のトピックで学ぶ　通訳ワークブック」浅野輝子他、名古屋外国語大学出版会

前期課程 2期 情報コミュニケーション研究 Ⅵ 中国語通訳スキル

楊　紅雲

授業概要並びに到達目標

授業概要：
本講義は、中国語通訳に必要な理論知識の習得と実践的技術、技能の養成を目的とする。具体的には、日中ビジネス、法律法規、医薬医療、観光案内、健康美容、映像文芸など諸分野において担当教員が長年経験してきた通訳の事例を紹介し、解説する。講義内容に合わせて実践的通訳トレーニングを行う予定、学生には関連する専門用語の事前学習及びロールプレイ、ディスカッションへの積極的な参加を求める。なお、この科目は中国語を母語とする学生を受講対象としている。
第14週目は、オンライン授業とする（Google Classroom）。

到達目標：
(1)中国語通訳スキルの基礎知識を習得すること。
(2)日中通訳に必要な技術、技能を訓練すること。
(3)中国語⇔日本語の変換力を鍛えること。

授業計画

第１回　オリエンテーション（概説）
第２回　中国語通訳基礎(1)：通訳者としての教養
第３回　中国語通訳基礎(2)：逐次通訳・同時通訳
第４回　通訳の技術(1)：商談（会議・セミナー）通訳
第５回　通訳の技術(2)：工場（製造ライン・見学）通訳
第６回　通訳の技術(3)：レセプション（展示会）通訳
第７回　通訳の技術(4)：司法（捜査・弁護・法廷）通訳
第８回　通訳の技術(5)：観光（案内・ショッピング）通訳
第９回　通訳の技術(6)：医療（医薬・診療）通訳
第10回　通訳の技術(7)：美容（コスメ・施術）通訳
第11回　通訳の技術(8)：映像（ロケ探し・製作現場）通訳
第12回　発表(1)：模擬通訳ロールプレイ
第13回　発表(2)：模擬通訳ロールプレイ
第14回　翻訳の仕事：中国映画（ドラマ）字幕翻訳（オンライン）
第15回　まとめ（レポート）

成績評価基準

授業への貢献度（40％）、発表（30％）、レポート（30％）

教科書（参考書）

教科書：使用しない（資料を配付する）
参考書：
・高田裕子・毛燕『日中・中日通訳トレーニングブック』大修館書店
・窪田守弘・楊紅雲他『映画でチャイニーズ』南雲堂フェニックス出版
・楊紅雲『帝国的银幕ー十五年战争与日本电影』中国電影出版社